

小学生クラスの小学校体験入学付き添い日誌から

齋藤 恵

1. はじめに

日本にやってきたJ S Lの子どもが初めて日本の学校に行き始めるとき、子どもたちはどのように新しい環境を受けとめ、そこに参加していくのでしょうか。どんなことが困難で、どんな支援を必要としているのでしょうか。

所沢センターの小学生クラスでは、2004年に研修期間が6ヶ月間に変更されて以降、研修終盤期の約1ヶ月程度、近隣の小学校での体験入学プログラムを実施しています。筆者は、子どもクラス担任として、子どもたちの体験入学に付き添い、時にはクラスに入り込んで手助けをしながら、子どもたちの様子を間近で見してきました。本稿では、体験入学に参加した子どもたちの様子を紹介しながら、J S Lの子どもへの支援について考えたことを述べていきたいと思います。

2. 体験入学プログラムの位置づけと概要

センターの「子どもクラス」の対象となるのは、中国・サハラ以南の帰国者である家族に伴われて中国・ロシアから来日した子どもたちです。来日後すぐに帰国者センターに入所し、6ヶ月間の日本語初期指導を受けた後、家族とともにそれぞれの定着先に移り、現地の小学校に編入学していきます。

「子どもクラス」では、子どもたちが来日6ヶ月後には定着先の小学校に編入することを念頭において、(1) 学校生活や日常生活に必要な基礎知識・基礎技能を身につける、(2) 学習活動に必要な基礎知識・基礎技能を身につける、(3) 学校生活および学習活動の基礎となるコミュニケーション力を身につける という3つのことを大目標とし、ことば・行動・交流・学科という4つの柱を軸に、カリキュラムを組んでいます。文字(平仮名・カタカナ)と簡単な表現などから日本語学習を始めますが、それだけではなく、センターを、子どもたちにとっての「模擬学校」と位置づけて、国語や算数、社会、

理科、体育、図工、音楽といった教科の授業もごく初期の段階から組み込んでいます。教科学習だけでなく、学校に入る前にセンターでできることは何でも体験させておこうという考えから、日直の仕事や連絡帳記入、そうじ当番、学級日誌なども子どもクラスの活動として行ないます。学校生活の中の意味のある活動を通して日本語も少しずつ育てていこうという考え方です。

体験入学プログラムは、6ヶ月のセンターでの学習の総まとめとして、「模擬学校」ではなく「本当の学校」で日本の学校生活を体験してみようを目的として、研修の終盤期に実施します。その流れは次の3段階になります。

(1) 事前学習

子どもたちには、研修の初期から体験入学があることを予告し、教室には各学年の教科書を置いて、いずれ日本の学校に行くことになるのだということ意識させるよう努めています。実質的な準備を始めるのは体験入学の2週間ほど前からになります。日本の小学校生活を紹介するDVD教材^①を見ながらイメージ作りをしたり、また、「こんなときはどうする?」と、学校でのいろいろな場面を写真やDVDで見せて、場面に合った簡単なことば（「見せて」「いっしょに(いい?)」「ごめんなさい」等）をロールプレイ(ごっこ遊び)で練習してみたりもします。体験入学先の学校の都合が合えば、実際に学校見学に行き担任の先生に挨拶に行くこともあります。また、保護者も交えて、学校の持ち物の説明や生活上の諸注意を母語で行ないます。教科書等、学校に必要な教材はセンターで準備して貸し出しますが、ノートや給食のナプキンなどは、保護者と一緒に、定着先でも使えるものを準備させます。これらのことを通じて少しずつ「学校に行く」気持ちを高めていきます。

(2) 実際の体験入学

体験入学中は、転校生のような形で学校の各クラスに入れてもらい、毎日朝から登校してクラスの活動に参加します。センターの講師が1名登下校を引率し、授業時間中も各教室を巡回する体制をとっています。付き添い講師は、基本的には廊下や教室の後方で子どもの様子を観察し、支援が必要な場面では子どもの傍らに入り込んで手助けするようにしています^②。

体験入学期間の1～2週間は「ならし期間」として、学校に行くのは朝から給食までとし、午後はセンターに戻ってきて、復習と明日の準備を行う時

間を入れます。主に、その日の宿題をやったり、持ち物を準備したりするのですが、子どもたちは、学校で日本語がわからずじっとしている反動からか、学校を出るとずっとその日の出来事を母語で話し続けることがほとんどです。ですから、この時間は母語ができる講師が担当して、その日の学校の出来事を母語で思う存分話させるようにしています。

「ならし期間」を終えると、小学校の活動にフルに参加するようになります。時期によっては、運動会や音楽会、保護者参観等の行事にも、保護者も一緒に参加させてもらっています。

(3) 事後学習

約1ヶ月間の体験入学を終えると、お世話になったクラスの担任の先生や友達に手紙を書きます。また、体験入学報告書を書いて、家族やセンター講師の前で「体験入学報告会」を行ないます。体験入学報告書は、穴埋め形式のシートに自分の体験したことを書いたものを文集にまとめるのですが、普段書くことが嫌がる子も含め、みな熱心に取り組みます。それだけ体験の力が大きいのだと思います。報告会も、報告の内容はとても簡単なものになりますが、学校で撮った写真を紹介したり、聴衆からのいろいろな質問に受け答えしている姿を見ると、どの子も一回り大きくなったな、と実感できる時間です。これらの活動を終えると間もなく、センターの研修期間が終了し、子どもたちは正式に日本の学校に編入していきます。

3. 体験入学の日々から

体験入学期間中、センター講師の付き添いは複数の講師が交代で行ないますが、「体験入学日誌」に、各時限の授業内容や、それぞれの子どもがどんな様子で過ごしていたか、また、その日の宿題や翌日に準備するものを記録し、引継ぎに利用しています。ここでは、体験入学日誌の記述を引用しながら、体験入学での子どもたちの様子を紹介していきます。

3-1 学校でリラックスできるようになるまで

(1) 低学年の子どもたちの様子

体験入学は、子どもたちの緊張と共に始まります。センターではいたずらばかりしている元気いっぱいの子どもでも、学校に入るととても静かになってしまいます。そんな緊張でガチガチの子どもたちを、学校の各クラスでは、転校生と同じように、興味津々な面持ちで迎えてくれました。

特に低学年のクラスは大歓迎モードです。朝の会の後、引率講師が教室をのぞいてみると、センターの子どもがクラスメートに囲まれていろいろと話しかけられ、逆にセンターの子が困っていた…ということも少なくありません。そんな環境のおかげもあり、低学年の子どもは、比較的早く学校に馴染んでいく子どもが多いようです。

2年生に入ったLくん(8歳)は、初日から、休み時間になると、女の子たちに音楽会で発表することになっているピアノを教えてもらっていたり、男の子たちに誘われて校庭に出てかけっこをしたりサッカーをしたり、だんだんと緊張がほぐれていくようでした。ことばが通じなくても、一緒に遊ぶことが、友だちになる第一歩になったようです。当初、Lくんが自分から日本語で話すということとはほとんどありませんでしたが、先生の指示が全部分からなくても、周りの子の様子をよく観察して、時にはクラスメートに教えてもらいながら、行動していました。

同じく2年生のSさん(7歳)は、2日目から日直に当たっていたのですが、ペアになった男の子に教えてもらいながら、大きな声で授業前後の号令や給食時の挨拶をしていました。Sさんの場合は、2日目くらいからポロポロと独り言のように日本語を使う場面が増え始めました。図工で、隣の子とペアになり、向き合ってお互いの顔を描くという授業では、周りの子達が互いの顔を見合うことに照れてなかなか筆が進まないのをよそに、自分のペアの男の子の顔をよく見て大胆に描いて、ついでに「お名前は？」と相手の名前を尋ね、逆に相手の男の子が照れている、というような場面もありました。Sさんは、センターでは、中高学年に交じって勉強しており、自分だけうまくできないと、授業中でも遊び始めたり、逆にかんしゃくを起こして泣いて

しまうようなこともあったのですが、小学校で、同年代の子どもたちと一緒に過ごすようになって、生活態度も学習態度も落ち着き、S自身も、一緒に対等に遊べるクラスメートができて本当にうれしそうでした。

【体験入学日誌より 2年生、S、女子】

2日目 日直、隣の席の男の子に教えてもらいながら号令をかけたりにしていた。「きれい、だいじょうぶ、おおい、かんたん、どこ、なんで？かゆい、できる、できない、わかります」など、知っている言葉が独り言のように出てくる。日本語環境に合わせようとしているのか？

3日目 体育【ドッジボール】準備運動も友だちの様子を観察しながら真似ている。ドッジボールも友だちに手を引いてもらってうれしそうに参加している。

音楽【ピアノ練習】自分のピアノを忘れてきた子がつきっきりで教えてくれていた。
給食時 体育で疲れたせいか、めそめそ泣いていたが、昼ごはんはおかわりしていた。

4日目 算数【くり下がりのある引き算】S、よく前を見て先生の真似をしようとしている。指示はわかったり、わからなかったり。練習で使ったタイルの片づけを周りの子達を手伝ってくれる。

生活【「お気に入りの場所」について話し合い】Sも、先生にお気に入りの場所は？と聞かれたが分からず答えられなかった。そうしているうちにSの意識は金魚に…。話し合い中心の活動だと、ほとんど理解できず、お手上げ。付き添い講師が絵を描くなどして少し説明するが、集中は欠いている。でも、みんなが手を挙げているとSも挙げてしまう。

5日目 算数【くり下がりのある引き算】ノートの書き方も大分慣れてきた。算数の授業は自信を持って参加できるようで、授業中も比較的集中している。全体で計算のやり方を確認するときも、板書を見ながらみんなのやりとりに参加できる。

例)「●から★を引くと()。」「()の中に入る数字を言える。

低学年の子どもは、学校生活や集団生活に不慣れであることが多いです。例えば、Sさんは、実は中国では小学1年生に半年在籍しただけでした。そのため、体験入学の初めのうちは、センターの講師が他の学年の子どもよりも多く付き添うようにしていました。Sの場合は、体育などで疲れてしまったり、付き添い講師の姿が見えなかったりすると、泣き出すということもありましたが、1週間もたつと随分落ち着いてきて、生活面に関しては付き添い

講師がいなくても、友達や先生に助けてもらったり、クラスメートや先生の様子をよく観察して、なんとかやっつけていけるようになっていきました。

授業参加の面では、書写や図工や漢字練習、計算練習など、やる事が明確な活動なら補助なしで十分に対応できるものの、国語や生活の授業など、教師と子どもが、やりとりをつうじて学習を進めていくような授業では途中で集中が切れてしまうようでした。付き添い講師を呼んで、補助を求めることもありましたが、たいへんは、わからないと集中が続かず、教室にいる金魚に気をとられていたり、下を向いて消しゴムをいじっていたりしていたので、付き添いが入り込んで補助する必要がありました。

全ての低学年の子どもが、クラスメイトとすぐにうちとけて学校に馴染み始めるわけではありません。1年生に入ったMさん(6歳、女子)は、しばらくの間じっと固まっていました。周りに投げかける視線も鋭く、警戒している様子でした。Mさんは、中国でも就学前の学前班に通った経験しかなく、無理もなかったのかもしれませんが。この時は5月で、クラスメートも学校に通い始めたばかりの1年生です。Mが授業に参加するには、多くの場合、入り込んでの補助を要しましたが、特に補助をしなくても、Mが周りの子どもたちの様子を真似ながらがんばっている場面も多く見られました。

【体験入学日誌より 1年生、M、女子】

6日目 国語【教科書「ともだちいるよ」の音読】Mも周りの子の様子を見ながら口を動かしている(読んでいるわけではないだろう)。**【ひらがな「お」「け」の書き方** 空書きなども一緒にやっているし、ノートの書き練習もやって終わったら挙手している。

図工【おりがみでアジサイを折る】やり方がわからなくて止まっていたので、補助して一緒に作った。

●先生のクラス全体への指示はわかっていないが、周りの子を見て真似ている様子。本当によく見ている。

●隣の席の男の子(eくん)より「勉強のときにMさんが折り紙で遊んでたから、ダメだよ、といったらMさんに叩かれた」と不満げな訴えあり。

●担任の先生より、「昨日、初めて、『せんせい、かみ(紙)ありません』と日本語で言いました!」と報告あり。

7日目 国語【「あのね、せんせい（おとうさん、おかあさん）」の短作文】MIには難しいので、MIに「中国語で書いてもいいよ」と伝えたが、しばらくしてもう一度様子を見に行くと、前の子が書いているものを立って見ていて、何か思いついたのかニコツとして何か書き始めた（たぶん日本語で）。

11日目 図工【運動会の絵を描く】画用紙をもらいに行くときも、周りの子の様子を見てから、一番最後に立ってもらいに行く。担任の先生に「何を書くの？」と聞かれ、板書されていた種目の一つを指差すが分かっているのか不明。付き添いが確認するとよくわかっていなかったで、もう一度運動会で何が楽しかったかやりとりし、玉入れの絵を描き始める。途中で、他の子が画用紙いっぱい大きく描いているのを見て、描き直した。
昼休み 教室で折り紙をしている女の子たちのところに自分から近づいていって、一緒に遊んでいる。

Mさんのように、最初は警戒の強かった子どもも、日を追うごとに緊張がほぐれていくようでした。休み時間に、Mが自分から一緒に遊びたい子のところに近づいていって遊んでいる様子が見られたことも大きな進歩です。その一方で、Mと、隣の席に座っていた男の子（eくん）の小さなバトルが顕著になり、付き添いに入っていたセンター講師の間でも話題になりました。eくんは、Mの行動をよく見ていて、何かあると「こうするんだよ。～しちゃだめなんだよ」と、Mに教えてくれていました。しかし、Mはなかなかそれを聞こうとせず、上記の6日目の記述にもあるようにMがeくんを叩いてしまう、ということもあったようです。eくんは、最初は、自分たちが先生に教わったことをMさんにも教えてあげよう、という親切心からいろいろと言ってくれていたのだと思います。しかし、Mが言うことが聞かないのでイライラが募り、それでもMのことが気になってしょうがないようで、体験入学終了の3日前に担任の先生に見つかって即席替えとなるまで、小さなバトルが静かに続いていました。

（2）中高学年の子どもたちの様子

中高学年の子達はどうかでしょうか。低学年の子達と比較すると、中高学年の子どもたちは、日本語が聞き取れなくても、学校の中で自分がどういう行動をとればいいのかよくわかっています。また、クラスメートも、センター

の子どもたちが困っていると、さりげなく親切に助けてくれている姿が見られました。ですから、低学年の子どもに比べると、付き添い講師が補助に入らなくてもなんとか対応できる場面は多いです。

4年生に入った F くん（10歳）、R さん（10歳）も、クラスメートに助けられて学校に少しずつ馴染んでいきました。R さんの場合は、初めから、クラスの女の子たちの数人が、休み時間に R さんが一人にならないように、面白い本を見せてくれたり、一緒に行動しようとしてくれていましたが、R さんはどう反応しているのかわからない様子で、困ったような顔で過ごしていました。そうしているうちに、前の席に座っていた a さんのことが体験入学日誌に頻繁に登場するようになります。a さんは、R の前の席に座っていて、何かと R のことを気にかけてくれていました。

【体験入学日誌より 4年、R、女子】

5日目 休み時間…クラス対抗でリレー対決をしている。Rもaさんに連れられて参加。理科【校内の自然観察】Aさんと一緒に行動。絵は自力で書いているが、説明文はaさんのを写させてもらっていた。

国語【音楽会の目標を書く】Rはまず中文で考えてから日本語で書いた（日本語に訳する時に補助）。Rの前の席のaさんとbくんは、とてもRを気にかけてくれ、Rが中国語で書く様子も「すごいねー」と言いながら見ている。

7日目 音楽会の歌の練習：aさんに教わりながら大きな声でうたっていた。手話もにこにこしながらやっていた。

10日目 いつも親切なAさんが休みで、R、一人になる場面が多い。

12日目 公園でオリエンテーリング。aさんと同じ班で、他のメンバーとも仲良くまわっていた。Rは、aさんがそばにいると安心できるようだ。aさんがいなかった日の様子と比べると、顔の表情などが全然違う。

もう一人、F くんは、勉強もよくできる、いたずらも大好きなやんちゃな男の子でしたが、学校に行ってみると、これまで体験入学に行ったどの子どもよりも、がちがちに緊張していて、休み時間も自分ではどうしていいかわからず固まってしまっているほどでした。当然、授業中も静かにじっとしており、先生に話しかけられてもうなずくのが精いっぱいでした。そんな F くんが本領を発揮したのは、2日目、体育の時間に50m走の記録を測ってい

た時です。スポーツ万能な Fくんは、クラスの誰よりも速いタイムを出しました。先生や周りの子たちに「はえー！はえ〜！（速い速い!）」と口ぐちにほめられ、ようやく少し、緊張が解けたようでした。Fくんは、その後も、学校で自分から声を出して話す、ということがほとんどありませんでしたが、休み時間に遊んだり、給食を食べたり、クラスの中でみんなと一緒に何かをすることを通じて、隣の席に座っていた cくんを始め、クラスメートと打ち解けていき、体験入学後に聞いてみると、クラスの男の子の名前をほとんどすべて覚えていました。特に、cくんは、算数や国語の授業の時も、今何をしているのか、Fくんと一緒に活動しながら、手取り足取り教えてくれており、Fくんも、付き添い教師が助けに入らなくても、かなりのことを理解して行動していたようです。

【体験入学日誌より 4年、F、男子】

5日目 筆者の所見…Fの表情がかなりやわらかくなった。cくんのおかげだと思う。

11日目 体育【ハードルを】F、うまい。タイムを気にしながらかなり本格的に取り組んでいる。クラスの輪の中にとけこんでやっている。

理科【へちまの観察】cくんがとても細かく丁寧に教えてくれている。先生の指示にもよく反応していて意味がわかっている様子。

給食…肉のおかわりじゃんけんに参加。同じ班の子たちとも馴染んでいて、日本語で話すことはないが、アイコンタクトや顔の表情などでみんなとコミュニケーションしている。

初めて日本の学校に行き始めるセンターの子どもたちにとって、友達や先生、安心できる相手がいることの意味は何よりも大きいと改めて実感します。緊張が続く学校生活の中で、少しでも安心感を持てるようになって初めて、いろいろなことが見えてくるのではないのでしょうか。

5、6年生の女子たちも数名、体験入学に参加しました。思春期にさしかかる高学年女子の体験入学は難しい、という印象があります。まず、6年生に入った Kさん（11歳、中国）のことを紹介したいと思います。Kさんは、来日当初は、日本語になかなか慣れず、センターでの授業時もおどおどする様子が目立っていたのですが、センターに慣れるにつれ、声が大きく、元気で明るい女の子だということがわかってきました。この時は6年生の女子が

3人おり、体験入学先の学校は6年生が2クラスしかないため、2人と1人に分かれて体験入学を行うことになっていました。Kさんならなんとかがんばれるだろうと見込んで、1人でクラスに入ってもらうことにしました。Kも「慣れるまではセンターの先生ができるだけ一緒にいるから」となだめると何とか納得し、体験入学が始まりました。

【体験入学日誌より 6年、K、女子】

2日目 音楽【歌の練習】K、歌詞が分からずつまらなそう。足をくんで、ポーっと立っただけ。むすっとした表情。

休み時間…隣のクラスに入っているZ（11歳、中国）のところにいってお互いどんな様子が報告し合っている。

3日目 基本的に教室の中では静かにしているが、付き添い講師がそばにいる時は、自分もクラスの担任の先生と日本語で話そうとする。やはり、物おじしない。

4日目 朝からあくび連発でだるそう。授業時はやることははっきりしていればがんばれるが、休み時間がつらい様子。

国語【短歌の観賞】付き添いが短歌の意味を筆談で伝えると「ああ！」とわかって、教科書を一緒に音読しようとするが、「私だけ（読むのが）遅い」と言って落ち込む。

算数【平均を求める】なんとか授業についていけている。

クラス担任の先生も、Kのことを心配してくださり、折に触れて個別に説明したり話しかけたりしてくれ、Kも、なんとか授業に参加しようと頑張っていました。特に、付き添い講師がそばにしていると、K自身もしり込みせずに、自分の手持ちの単語や表現を使って、大きな声で担任の先生に言いたいことを日本語で伝えようとすることもありました。しかし、休み時間などは何をしたいかわからなくなるようで、つらそうでした。クラスの子どもたちもKさんが困っている様子を見ると代わりに先生に伝えてくれたり、教室移動の時は声をかけてくれたりするなど、男子も女子も親切で、Kに気にかけてくれている雰囲気は、筆者にもよく見えていたのですが、どこまで踏み込んで関わっていいのか様子を見ているような感じもありました。そこで、筆者がKとクラスメートの間のつなぎ役となるように意識して付き添うことにしました。つなぎ役としての目的は、Kがセンター講師の前で見せている、K本来の活発な姿をまわりの子たちにも見せたいということです。Kは、教

室の中で、他のクラスメートと同じように活動したい、話したいという意欲が強く、付き添い講師と一緒にいると、授業の中身に関係のあることで自分の知っていることを簡単な日本語と中国語でいろいろと話していました（筆者は中国語があまりわからないので、筆者が付き添っていた時は、Kの発話のほとんどが日本語でした）。また、付き添いが一緒にいると、授業内容がわからないときも「わかりません」とはっきり言うので、それを聞いて周りの子が助け舟を出してくれたりすることも増えました。自分から話しかけるのをためらうKの代わりに、筆者がクラスの子にわからないところを尋ねるといこともありましたが、Kが困っているとわかるとすぐに反応してくれるクラスメートたちに、Kも少しずつ近づいていき、2週間ほど経過したころには、よほどのことがない限りは、センターの講師と一緒にいなくても大丈夫だろう、と思えるまでになりました。

【体験入学日誌より 6年、K、女子】

5日目 そうじの時間、Kの様子が気になって、掃除時の様子を見に行く。Kは、同じ班の子に連れられ、すでに掃除場所に行っていた。班の子たちはおしゃべりをしながら掃除しているが、Kはひとり黙って水道の流し場を掃除している。K、大きな虫を見つけて一人大騒ぎする（そばに付き添い講師がいたからかもしれない）。大きな声で騒いでいるKを見て、他の子たちはびっくりした様子。それを見て、「Kさんはね、本当はこんなに元気な子なんだよ」とつい、クラスの子たちに向けて宣伝めいたことを言ってしまう。

8日目 社会【奈良の大仏作りについて教科書などで調べて、プリントに書く】担任の先生は、教科書調べタスクは難しいので、Kは大仏の絵に色を塗るだけでいい、といってくださったが、本人が調べて書く作業もやりたそうにしていたので、補助に入った。知っている漢字を頼りに、教科書から抜き書きする練習をした。同じ班の子たちも、Kがわからないところを教えてくれるなど、とても協力的。

家庭科【調理実習】女子2人と同じ班で、野菜炒め、卵焼き、トマトサラダを作る。初め、班の子たちが準備しているところにうまく入れなくて立っただけ。付き添いが、班の子たちに「今日は何を作るの？」などと質問していたら、徐々にKにも「これやって」と作業を振ってくれるようになった。そのうちに、Kさんから「次は何をしますか？」「〜どこ？」などと同じ班のメンバーに問いかけるようになり、自分から参加し始めた。何か

を一緒にやる活動であれば、リラックスして参加できるようになってきた。

.....

12日目 (筆者の所見) このクラスは、特に周りの子がよく気づいて助けてくれるので、入り込みは最低限にしたほうがよいかもかもしれない(国、理、社でどうしても無理そうなときに限る等)。Kは付き添いがいると甘えるが、付き添いがいない時も彼女のペースでがんばっているし、日本語で話そうという意志もある。

昼休み 一度は付き添い講師の控え室に遊びに来たが、探しに来てくれたクラスメートに誘われて教室に戻っていき、一緒にトランプをして楽しそうに遊んでいた。

算数…K、隣の子に、今どこをやるの?などと自分から聞いて教えてもらっている。

14日目

昼休み…筆者が控え室にいと、Kが「gさんが明日の持ち物を教えてくれたけど、日本語が聞き取れない、通訳して」と呼びに来た。筆者、教室には行かず、「聞きます、わかりません、書いて」とgさんに頼むようにKを促すと、嫌がらずに教室に戻って行った。

(結果:セロテープのことだったらしい。gさんにもう一度聞いて分かったとのこと)

Kさんは、最初から同じ班だったgさんと、aさんという2人の女の子が特に親しかったのですが、その二人に限らず、クラス全体でKさんを仲間に入れてくれているという雰囲気がありました。特に、gさんは、途中から、Kと話すときは、Kがわかるように「ですます体」でゆっくり話してくれるようになりました。おそらく、センターの講師がセンターの子達にそのように話しているのを見ていたのではないかと思います。このようにセンターの子どもの日本語に合わせて話してくれる友達がいることに、驚きとともに感動も覚えました。また、この学年は実は4年生の時に、先述のRさんとFくんを迎えてくれた学年で、Kさんが頼りにしていたaさんは、実は4年生のときRさんにも親切にしてくれていた子です。aさんに限らず、6年生のクラス全体で、外国から来た子どもを自然に支える態度が育まれていることを様々な場面で見ることができ、本当に頼もしく思いました。

Kのように、初めは緊張が見られたものの、友達関係ができるにつれて、だんだんと学校やクラスに慣れていく子どもがいる一方、表面上は友だちもできてうまくやっついそうに見えて、実は、なかなかクラスの中で落ち着けず、昼休みになるとセンター講師の控え室にやってくる子どももいました。

【体験入学日誌より 6年、Z、女子】

2日目 音楽【いろいろな音楽を聞いて、どんな楽器を使っているか考える】隣の女の子が色々教えてくれている様子。音楽と言うこともあって、リラックスした様子。

3日目 書写 隣の女の子が時々見て、やり方を教えてくれている。「書けたら（先生に）出すんだよ」と、これも隣の女の子がつれて行ってくれる。この子は休み時間も一緒に遊んでくれている。

8日目 放課後、筆者と、友だちとの交流について話す。（Zの言ったことの要約）「隣の女の子の話し方、文が長くて、私は全部はわからない。でも、全部「うん、うん」って答えている。」←ストレスを感じている？

10日目 先週に較べて友だちとの関係が薄くなった?!（前はつつきあったりしていたが…）今日はKさんのところへよく行っていた。（※筆者以外の付き添い担当の所見）

11日目 家庭科【調理実習の準備】わからないことがあっても、隣の子に聞いたりはしていないよう。（※もう一人別の付き添い担当の所見）

12日目 朝自習で漢字練習のタスク…板書された指示を呼んで、自力でもだいたいわかったようだが、何回練習したらよいか、ノートにどうやってかいたらいいのか、わからない、と小声で訴える。センター講師よりもクラスメートに聞いたほうが分かるのに、自分では隣の子に聞けないでいる。

昼休み：クラスを出て、センター講師の控え室に来て休んでいる。（筆者所見）Zは人一倍細かいことを気にするタイプで、聞きたいことがたくさんあって不安なはずなのに、友だちや担任の先生に日本語で聞こうとすることが少ない。ストレスが強そう。

算数：昼休みの様子とは打って変わって、きりっと真面目な顔で、問題に取り組んでいる。

Zは、初めのうちは、先述のKとは対照的に、周りの子達と親しくなって、休み時間もじゃれあっていたり、本当に楽しそうにしており、筆者も安心して見ていました。しかし、日がたつにつれて、新鮮さがなくなってしまったのでしょうか、1週間もするとクラスメートの距離が広がったように見えました。また、Z自身が「話しても、相手の言っていることがわからない」と限界を感じ、自分から距離を置いているような印象もありました。簡単なことなら聞ける程度の日本語は身につけているのに、自分から日本語を話そうとする意欲が減ってしまっているようにも見えました。Zの「話しても分からない」という気付きは、センターの中学生の体験入学（一週間程度）の時

にも聞かれることばです。「小学生だからすぐに慣れる」などと、簡単に期待してはいけないのかもしれませんが。それでも、Zは、体育のマット運動やボール、家庭科の調理実習など初めての経験を怖がりつつ、一つ一つ体験していく中で、自然とクラスメートに助けってもらうことが多々ありました。特に図工の木工には熱中し、時々友だちや先生に手伝ってもらいながら、短時間でも緻密な作品を作っていました。外国から来た子どもが学校に入っていく中で、友だちの存在はたしかに重要です。しかし、このようなZさんの姿を通じて、学校でなかなか安心感がもてずにいる、様々な活動に取り組むことを通じて、クラスメートと関わったり、お互いを知り合ったりできる、さらに、そういった活動を一緒にすることの積み重ねが、いつか、学校で過ごす安心感にもつながっていくのではないかと感じました。

3-2 授業への参加

センターの体験入学は、日本語学習を始めて4ヶ月半程度の時期に行なわれるので、学校の様々な教科の授業に参加できる度合いは非常に限られています。しかし、学習内容で共通項目の多い算数などは、来日前に学年相応の力がついている子どもであれば、授業に参加できる子が多く、中には自分で手を挙げて発表しようとする子もいました。また、低学年の国語の平仮名や漢字の学習は、センターの初期指導内容と共通する部分が多く、センターの子どもにも取り組みやすい活動がかなりありました。体育や図工、家庭科、音楽などの技能教科は、センターの子どもたちが初めて体験するものも少なくありませんでしたが、目で見てわかり、かつ、クラスメートに助けってもらいながら一緒に取り組めるものが多く、クラスメートと打ち解けるきっかけにもなっていました。

一方、大変な教科は、やはり、国語、社会です。高学年の子どもの場合は、1週間ぐらいたってそれぞれの教科の授業の様子が分かってくると、国語の授業の前に「次の時間は国語だから、私の教室に来て」と、付き添い講師を呼びに来ることもありました。実際、国語の学習は、高学年になればなるほど理解も参加も困難になり、漢字圏の中国の子どもはともかく、非漢字圏の

ロシアから来た子どもに対し、何をとっかかりにして授業でやっていることを理解し、参加できるように支援したらよいのか、付き添い講師の方が絶望的な気持ちになることもありました。それでも、子どもたちは、母語が分かる講師がいるときは通訳を求めたり、母語ができない講師でも「わかりません」と耳打ちして助けを求めたり、初めから授業に参加することを諦めてはいません。学校で出たプリントやノートのまとめの宿題などにしても、「これ、どうやってやるの?」と放課後に質問してきたり（宿題のやり方などは、クラスの子に聞いたほうが分かるのですが）、朝、教室に行く前に「先生、宿題、見て」と提出前にチェックを求めたり、必死です。また、教科のまとめテストにしても、問題が日本語で書かれていて難しかったり、体験入学期間中に学習した範囲外の内容が出題されていたり、何かとハンディがあるからできなくても仕方ない、と思ってしまうのですが、子どもたちは、よくできると本当に喜び、少しでも間違いがあるとがっかりした顔を見せていました。

センターの子どもたちは、国語など、独力で授業を聞いて、他の子どもと同じように考えをめぐらせたり、表出したりすることは難しいにしても、補助者がそばにいれば、自分のわかることを話したり、何とか自分も授業に参加しようとすることもありました。まず、4年生に入ったNくんの国語授業時の様子を少し紹介します。

【体験入学日誌より 4年、N、男子】

3日目【漢字：学習した漢字を組み合わせて熟語を作る】N、何をやっているのかわからずイライラしている。入室して、何をしているか簡単に説明しながら、一緒に授業の様子を見た。【新聞作り】社会科見学の報告を書く。Nも、センターの行事で見学した施設の報告を中国語で書くように促したら落ち着いた。

6日目【文章読解のテスト】（※母語ができる講師が補助）文章読解テストのやり方を中国語で指導（問題のキーワードを文章中から探す）やっているうちに表情が柔らかくなった。

8日目【5分間作文・漢字】「今日体育があります。楽しみです。…」と、自分でテーマを聞いて書き始めていた。補助した内容は、Nの言った単語を辞書で教えたり、漢字表記を教えたのみ。電子辞書を貸した。

14日目【伝言、メモの取り方】先生の説明の板書をうつしている。クラスで伝言ゲーム。

Nも指名されて伝言の受け手として参加し、聞き取った内容を発表。結構できていた。本人も満足げ。

18日目【「白いぼうし」場面に分ける。第一場面を視写】指示が分かっていなくて、自分では動けない。補助。やることがわかれば結構参加できる。

19日目【「白いぼうし」の第1場面の理解】独力ではほとんど理解できない状態のため補助。クラスのやり取りについていけないので、付き添い講師とやりとり。小声で第一場面を読みながら、第一場面の内容を説明。「松井さん」は気持ちはどうな気持ちか—という板書された発題を理解させ、教科書でキーワード（漢字で書かれたことば）をひろいながら、物語の流れを推測していく。

20日目【「白いぼうし」】（※入室タイミングが合わずあまり補助できず）本人は教科書のどこを見ていいかわからないのか、本も開けていない。休み時間に内容を確認すると、本文の中身は知っていた（※前日解説済みだからか？）

21日目【「白いぼうし」第2場面の読みとり】教科書を忘れて隣の子に見せてもらっている。板書をノートにちゃんとうつしていたので、やりとりしながら、ことばの確認。N「ぼうしは誰の？」とちょっと興味を持っている。

23日目【「白いぼうし」第3場面の読みとり】「わかんない」と投げ気味だが、要約して分かるように話すと、うなずきながら聞いている。

Nくんの場合は、付き添いが一緒にいるときといないときで、国語の授業への参加意欲が大分違っていました。最初にNくんのクラスで国語の授業の様子を見たとき、Nくんは、センターで見たことがないようなイライラした顔で座っていました。付き添い講師が入室していないときは、やや投げ気味に教科書もノートも開かずにいることもありました。これはNくんに限らず、他の子でも、小学校に行き始めて日がたつと、少しずつ見られるようになってくる現象でもあります。しかし、付き添い講師が、傍らで授業の内容をNに分かることばで話したり、教科書の担任の先生が話している内容に相当する部分を指し示したりしていると、クラスでの授業内容に意識が向いてくるのが感じられ、21日目に「白いぼうしは誰の？」というNからの問いにもつながっていきました。少しでも「わかった！」と感じられる機会を保障することが、授業参加を支援する第一歩になるのではないのでしょうか。

次に、先述のRさん（4年生）が参加した国語の「一つの花」の授業の様

子を紹介します。Rも、初めて「一つの花」の授業に参加したときは、本当に困ったと思います。授業後、担任の先生に聞くと、しばらくはこの単元を学習するということだったので、Rが少しでも授業に参加する手がかりができるようにと、センターでの補習の際に母語で物語の内容を解説する時間を設けました。その後は、国語の授業時に付き添い講師が教室に入るようにし、簡単な日本語で言い換えたり、漢字の筆談とジェスチャー、日中の電子辞書の表記を示すなどして、少なくとも授業で何をやっているかを、Rに伝えるように努めました。さらに、授業では、登場人物の心情を想像して書く、という日本語での表現を要求するタスクが何度かありました。Rには、それをいきなり日本語で書くのはむずかしいので、最初は筆者から「中国語で書いてみる？」と促しました。すると、Rは、物語の内容は理解できているので、中国語で考えて、自分の考えを表出することができました。それをヒントに、日本語でも書くことにつながりました。

【体験入学日誌より 4年、R、女子】 ※以下、網掛け部分は授業の流れを記したもの

国語「一つの花」の授業より

2日目 【朗読と要点のまとめ】

R、全然わからなかったと思う。→放課後、センターで大体の内容を中国語で解説

3日目 【①音読】 Rも一緒にやろうとするが、普通のスピードにはついていけない。

【読みとり（戦争時の生活の様子）】

(1) 各自傍線を引く

(2) 全体でやり取りをしながら先生が板書。児童はノートに写す

(3) 児童、各自戦争時の主人公の心情を考えてノートに書く

(1) は、付き添い講師が傍らで、筆談でタスク内容を教えながら一緒に行なう（付き添いが下線を引く場所を示して、その内容を電子辞書で意味を示しながら理解させる）

(2) 担任の「書いて」という指示は聞き取れず、付き添い講師が促すと、熱心に板書を写し始めた（濁点は抜けるし、板書で形が崩れた時は読み間違える。他の子より時間がかかるので、担任の先生が「Rちゃんはゆっくり書いていいよ」と言ってくれる）

(3) 付き添い講師が筆談+ジェスチャー等で質問の意味を伝え、中国語で書いていいと伝え、自分で考えて書いた。さらに、簡単な日本語訳を口頭で教え、日本語文も

書いた。

※音読などにはついていけないが、単語レベルの中国語を電子辞書で補えば、ある程度物語の流れもタスクの内容も理解できる。表出も、中国語でなら可能。

7日目 【「ゆみ子」のお父さんの心情を読み取る】グループでの活動になっていたが、Rにはタスクを理解するのが難しく補助が必要だった。筆談+ジェスチャーで教えると「中国語で書いてもいい？」とRが自ら確認してから、さらさらと書いた。周りの子たちはRが書く中国語に興味津々。

9日目 【音読】各自立ち上がってブツブツ読み、読み終わったら座る、というタスク。Rは初めから立たず。(※)

【筆者の言いたかったことをまとめる。「ひとつだけ」の意味は？】先生が話しながら板書。先生の「じゃあ、書いちゃってください」という指示に即反応して、Rもぱっとノートを開いて書き始めた。

※センターに帰ってから、「『一つの花』の音読の練習してみたら？」と促すとかかなり素直に従って、熱心に大きな声で取り組んだ。

Rに限らず、学年相応の母語の力がついているこどもであれば、日本語では表現できないことも、母語を使えば考えて表現することが出来る子は少なくありません。この段階の子どもたちにとって、授業の中で母語で書いてみてもいいよ、それから日本語でも書いてみよう、と認めるゆとりを持つことが、多くの子どもの助けになるのではないかと思います。そして、子どもにはじめから「わからない」「できない」と諦めさせるのではなく、どの言語を使ってでも考え続けさせることが、将来的には日本語で学ぶときにも生きてくるのではないかと思います。

3-3 学校で、クラスの友達と一緒に勉強することの意味

(1) 日本語の変化

子どもたちは、それぞれのペースで日本の学校という新しい環境に少しずつ慣れていきます。それと同時に、子どもたちのことば（日本語・母語）にも変化が見られるようになります。

学校の中で日本語を使う度合いは、子どもによってかなり異なりますが、

ほぼ共通して見られたのは、学校外での独り言やセンターの講師とのやりとりの中で、日本語を話そうとする場面がどんどん増えていくということです。学校での一日を終えて、センターに戻るとき、初めのうちは、子ども同士、母語でその日の出来事を話していることが多いのですが、徐々に、子どもたちが口々に、センターの講師に向かって、日本語でいろいろなことを話し始めるようになります。まるで、学校の中で聞いて頭の中で溜めていた日本語を一気に吐き出すかのような勢いです。話し方も、センターの初期指導で教えるような「～です、～ます」といった話し方から、「～だよ」「わかんない」など、日本の子どもの話し方へと変化していきます。また、「センターでは『ありません』って習ったけど、学校では『ない』って言う」と、センターで教えられた日本語と学校で聞いた日本語の違いを分析して話す子もいます。

学校の中では全然話さない子どもも、教室の中で、先生やクラスメートが話す日本語をじっと聞いています。センターでは教えない、悪いことばを覚え始めるのも学校に行き始めてからですし、担任の先生が子どもたちを叱るときに使うことばもよく聞いて覚えていて、そっくりな言い方で再現できる子もいます。センターの子どもたちの日本語は、日本の学校で生活し、学んでいくためには、まだまだ不十分ですが、学校で先生やクラスメートと一緒に過ごす中で、さらに伸ばしていけるものだということを改めて認識させられます。

さらに、家族の話によると、低学年の子どもの場合は、帰宅後、うちで遊んでいるときも日本語で話している、あるいは、寝言が日本語になっているという子も複数いました。中高学年の子どもでも、中国語の話す力に変わりはないものの、書く力が弱ってくるケースはかなり多いです。日本語環境にいる時間が増えることによって、母語から日本語へ、メインのことばが置き換わっていくスピードが加速していくようです。このことに危機感を覚える親も多く、センターでは、修了前に保護者向けに「子どもの母語保持」に関する授業を行っています。

(2) 学ぶことへの動機付け

これに加えて、同じ学年・年齢の子どもと一緒に学ぶことを通じて、セン

ターの子どもたちの学ぶ意欲を刺激できる、ということも、体験入学の大きな意義だと考えています。センターの小学生クラスは、子どもの数もそれほど多くないため、異学年の子どもを集めてクラスを編成し、部分的に学年別指導を行なうにしても、異なる年齢の子どもと一緒に学習することが多いです。これにはメリットもデメリットもありますが、デメリットを挙げるとすれば、高学年にとって簡単な学習内容を扱うこともあるため高学年が油断してしまうこと、また、低学年の子どもに少し背伸びさせてしまうことが挙げられます。国語や社会など、教科学習に参加する難しさを体験することは、ともすると、学習への諦めを助長させてしまうかもしれません。それでも、現段階の日本語の力では難しくても、同年齢・同学年の子どもと一緒に過ごし、今の自分の学年の子どもはこんなことをやっている、と知ることで、自分の学年ではこんなことをこんなふうに学習するのだということを体験的に理解することは、本当に大きな意味があります。

いろいろなエピソードがありますが、印象的だったことを一つご紹介します。学校での作文の活動の際の子どもたちの反応です。センターの授業では、「えー、まだ日本語で書けない」と嫌がって、自分からは書けず教師の補助に頼ろうとする子どもでも、学校で、同学年の子どもたちが頑張っている姿を見ると、目の色が変わって、補助してくれる人がいない場面でも、何とか自分で知っている日本語を絞り出して書こうとする子どもが何人もいました。例えば、先に登場した2年生のSさんなどは、初めは、原稿用紙1行程度しかかけなかったのですが、ほぼ毎日国語の時間などに自由作文を書いているうちに、原稿用紙で半分以上の文が書けるようになりました。もちろん、書かれた内容は断片的な部分もあるし、いつも同じ文を繰り返していることはあります。それでも、友達が書いている中で自分も一緒に書くということを通じて、Sさんが、にこにこ楽しそうに書く姿を見られたことは、筆者にとって大きな収穫でした。

4. おわりに 初期指導から、中長期的な日本語支援へ……

体験入学への付き添いを通じて、筆者が一番新鮮に感じたのは、子どもた

ちが「学校は行くものだ」と思っているということです。体験入学は決して何の葛藤もなしに常に楽しく行なわれているわけではありません。朝学校に行くとき、暗い顔をしてわざとゆっくり歩いてみたり、校門や教室の前で「怖い」とつぶやいたりする子どもがいます。すぐがんばっていても、途中で頭痛を訴えたり、涙目になったり、学校の行き帰りに反抗的な態度を取ったりもします。また、学校では楽しそうに遊んでいても、実は「学校、おもしろくない。日本語わからない」とふとうちあける低学年の子や、家で「日本語がわからない」と泣いているという子もいました。でも、「学校に行かない」とは言い出さない子ども達です。だから、その気持ちがあくじけないように支えたい。どうやって支えていけるのだろうか・・・と考えています。

今、外国から来た子どもの支援は、「初期指導」とその後の「教科指導」という大きく分けて二つの段階でとらえられることが一般的で、この枠組みの中では、所沢センターは「初期指導」の部分を担当しています。しかし、中国語やロシア語が通じるセンターだけの学習環境では、子どもたちの学習意欲を喚起する動機付けが弱い、というジレンマがあります。センターでも、「日本の学校に行ったら・・・」と子どもたちにイメージさせながら、「どうして、今、日本語を勉強するのか」「どうして、今までやってた中国語やロシア語でじゃなく、日本語で勉強するのか」ということについて話し合うこともありますが、本当の意味で子どもたちが日本語の必要性を認識し、自分のことばとして使い始めるのは、日本の学校に行き、一緒に過ごす先生や友達を出会ってからなのではないかと思います。だからこそ、センターでの「初期指導」にとって、学校とのつながりを子どもたちに身を持って体験させる体験入学は不可欠なプログラムになっています。センターに限らず、どこでどのような形で外国から来た子どもを支援するにしても、その子が日常の大半を過ごす学校のクラスの先生やクラスメートや学校の活動とのつながりを持てるような支援を考えていくことが重要ではないかと思います。

もうひとつ、子どもたちは、センターでの6ヶ月間の研修が終わると、各定着地に行き、そこで学校に編入していきますが、その時、今の状態で、定着先の学校に通わせるのは大変じゃないか、もう少し見届けていたいという気持ちを持ちながら、子どもたちを送り出しています。子どもたちはある

程度のことは、自力でできるかもしれませんが、最初の段階で新しい環境になれるには、誰かの助けが必要です。また、抽象的で複雑なことばを必要とする学習活動に子どもたちが参加するにはさらに多くの困難が伴うでしょう。「初期指導」後の中長期的な支援、一人ひとりの子どもを初期指導後も長い目で見守っていけるような支援のしくみが、広く整備されていくことを期待したい、また、支援者支援などを通じて、その一端にも関わってけたら、と考えています。

謝辞：センターの体験入学プログラムに協力をお願いしている所沢市教育委員会と、センターの子どもたちを温かく迎えてくださった市内二つの小学校の校長先生、教頭先生、学級担任の先生をはじめとする先生方に心より感謝申し上げます。

① 「ようこそさくら小学校へ DVD」(国際日本語普及協会) など

② ただし、子どもが自力でもできそうな技能科目や、引率者がいるとクラスの子どもの気が散って授業に集中できない等、その場に引率者がいない方がよいと判断した時は、校内の控え室で待機するようにしている。